

情報の欠落とその補充

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

木内 修

0. はじめに

本稿は、現在言語学の一大勢力である認知言語学に大きな影響を与えた Bolinger (1977) で主張している “one form for one meaning, and one meaning for one form” を支持しながら、学校文法でいうところの形式主語と呼ばれている外置構文における *it* と *that* の意味機能に関して考察しつつ、その構文の本質を明らかにする。本来の主語が *top heavy* なために、意味の軽い *it* を形式主語と据え、真主語を後ろに回したなどということは方便であり、語順が異なれば、それは異なる視点や意味による言語表現であると本稿では主張する。

また、関係代名詞や関係副詞と指示代名詞の *that* や疑問詞 *what*, *which*, *when*, *where*, *how* における意味的な関係を考察する。言うまでもなくそれぞれ、史的には関係があることは周知のことであるが、現代英語という共時的な角度から眺めてみても十分類似した形であるならば意味も類似したものであると拙論では主張していく。また、関係詞を含んだ文の情報構造と疑問文の情報構造の意外な共通点も明らかにしていく。

さらに、本稿の成果は単に理論言語学に貢献するだけでなく、応用言語学、つまりは英語教育においても、その教授内容を提供するものでもある。

1. 有標構造

一般に、学校文法や初期の生成文法において、外置や右方転位などは基底構造からの派生¹と仮定している。例えば、*to* 不定詞主語構文は主語が長くなる (*top-heavy*) と、いわゆる形式主語 *it* を先に置き、本来の主語部分を右方へ移動させる外置構文が派生すると捉えてきていた。このような扱いは意味的側面を極限まで押さえ、統語操作に集中していた生成理論一派のみならず、意外にも、意味・機能に重点を置いているはずの、いわば機能文法一派でも「文の構成素の一部を右方へ移動させる」現象として「規則」化している。

本稿では、このような基底構造と呼ばれている言語現象とその派生として扱われている言語現象は、それぞれ別の意味を有し、一方が他方を生み出すという考えはとらない。便宜的

に、基底構造が無標ならば、その派生構造は有標と考えることにする²。

1.1 いわゆる外置構文の構成素

外置構文の議論の対象となる構成素は it であり that であり、to である。この問題を解決する手掛かりとして、神尾（1990）で提示された概念を援用する。ここでは日本語母語話者が英語学習において陥りやすい問題を確認し、その問題を解消してから更なる考察を進めることにする。

1.2 指示詞と人称代名詞の問題

まず、われわれ日本語母語話者が日常的に使用している「こそあど言葉」の「コレ/ソレ/アレ」を簡単に確認することにする。直感的には、距離による使い分けが機能しているような気がするが、日本語の（指示）代名詞の使い分けは、物理的な距離の問題ではなく、心理的な距離の問題であり、佐久間鼎の「指示の場」や神尾昭雄の「縄張り理論」では、話者の意識の問題であると論じられている。つまり話者の縄張りとは判断されたときは、「コの系統」であり、聴者の縄張りだと話者が判断した場合は「ソの系統」、そして話者・聴者のどちらの縄張りでもない、いわば第三者の縄張りのときに「アの系統」となっている。日本語では「コレ/ソレ/アレ」は指示代名詞として機能しているのである。英語では、一見、「コレ/ソレ/アレ」は“this/ it/ that”に対応しているように思われる。そのため英語学習者は対応していない母語と英語を一対一対応と捉え、対応していない部分は、例外事項として説明せざるを得なくなってしまう。その結果が、it の「特別用法」のオンパレードといった悲劇を招くことになっているのである。

言わずもがな、日本語の指示代名詞たる「これ・それ・あれ」は三項対立をなしている。ところが英語の this と that は「近い・遠い」という距離の違いによる二項対立であり、it は距離とは関係なく、指示代名詞とは全く次元の異なる I（一人称）、You（二人称）に対する三人称という人称代名詞と位置づけとなっている。英語母語話者による英語学研究では、Lakoff のような this と that の比較対照研究、また it においては史的言語学による非人称の it の指摘から、日本の学校文法でおなじみの it の特別用法の類別化に研究が集中している。つまり、英語教育の現場に立っていれば、日本語母語話者の英語学習において that と it を実際に誤用するという、誰でも気がつくようなことが、研究・教育において、ほとんど空洞化の状態になっている。これは、英語母語話者には、その言語直感から that と it の誤用が存在するとは意識されないためであろうし、英語教育と称される分野では、英語教育の現場の知見はほとんど皆無に等しく、理論言語学と同じように海外の知見をただ鵜呑みにしている輸入代理業者に成り下がっている結果であると思わざるを得ない。英語教育関連で上記の問題点を項目として扱っているのは、一割にも満たなく、例えば小寺（1996）や萩

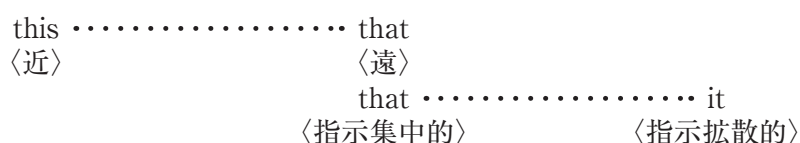
野（1998）の教材研究ぐらいがまともに現場主義的に教育に取り組んでいるものと思われる。同一の研究者による研究であっても小寺（1989：193）で、「it の特別用法というからには、主語にたてるものがよほどほかにはない場合であり、ある意味ではそれは苦肉の策として用いられているものと言えよう」と、it の存在価値を取り違えているのではないかと思われている記述さえもある。学校文法であっても、先行研究に対して盲目的に追従せず、そして、ひたすら実証主義的な江川（1991）や埋橋（1995）では「it の特別用法」という不適切な表現は使用していない³。ちなみに伝統文法では、Curme（1931：7）において“Situation and impersonal *IT* as subject”と言及しているように、非人称の it と環境 it というものを識別している。さらに興味深い指摘として、“...that is at first presented in only dim outlines by the situation, but is often late identified by a predicate noun...”と明記している。つまり存在は確かなのだが、ソレが何かははっきりしない。のちに記述名詞によってソレが何かしばしば明示される。つまり、「指示」しようとしても、はっきりとは「指示」出来ないわけである。このところも、this や that の指示代名詞とは異なり、it が人称代名詞に分類される語であることが再認識される特徴とも言える。

ただ、日本語母語話者にとってその母語たる日本語の「あれ・それ」と英語の“that/ it”の使い分けについて言及している学習参考書は皆無に等しく、瞥見ながら唯一、吉波他（2007）が、ある場面で that と it の使用でどちらが自然なのかというコラムを設けているのは秀逸であり、いい意味で学習者の視点に立つての英語教育の成果と言えよう⁴。

1.3 this、that そして it

英語において話し手の縄張りは this で指示される。英語には聞き手の縄張りは存在しない。つまり、日本語と縄張りの棲み分けが異なるのである。指示詞である this と that には、指示する対象が存在するわけであるから、話者との距離を設定することが可能であり、これは単純に「近・遠」の基準で捉えている。問題は指示詞ではない it と指示詞である that との間をどのような共通項で括りだし、関係付けるかである。そこで着目したのが指示性の強弱である。すでに Bolinger（1977）の中でも it の指示性の弱さ（the low referential value of *it*）に言及している。そこで神尾（1990）では指示詞である that には「指示集中的」、そして本来は人称代名詞であった it には「指示拡散的」という意味的特性を見出した。

図 1



（神尾（1990：156））

そこで、より that と it の使い分けが明示的である Kamio & Thomas (1999) から次のような適格文と非文との対立を見てみることにする。

(1) [A rushes into the room excitedly]

A : Guess what! I just won the lottery!

(何があったと思う? 宝くじに当たったんだ)

B1 : * It's amazing!

B2 : That's amazing! (Kamio & Thomas (1999 : 291))

(まあ、凄いわ!)

ここで問題となるのが、話者にとって事前に関知した知識かどうかという判断基準である。登場人物 A が興奮して走りこんできて、当該の台詞を吐いているので、通常、その内容は聴者である B にとっては、まったく知らない内容であるのが普通であるため、A の台詞をそのまま指し示し、「それが驚きだ」となる。このように言葉それ自体を直接的に指示する際には that を用いる。もし、B の台詞で it で受けて適格文として成立する場合は、(2) のように A の発話内容が、事前に関知していて、脳内に組み込まれた内容となり、直接相手の言葉を指し示すのではなく、間接的に脳内に組み込まれた「内容」を示すことになる。

(2) A : Guess what! I just won the lottery!

B : (Yes,) it's amazing! I heard about it on the radio, and I've invited everyone on the block to our house for the party!

(そうね、凄いわね。私、ラジオで聴いていたわ、それで家でパーティーを開くんで近所の人みんなを招待したのよ) (Kamio & Thomas (1999 : 291))

(3) A : Overnight parking on the street is prohibited in Brookline.

(ブルックラインでは、一晩中通りに車を駐車することは禁じられているのだ)

B1 : That's absurd!

B2 : It's absurd!

(そりゃ、馬鹿げているな) (Kamio & Thomas (1999 : 292))

(1) と (2) の that と it の使い分けと同様に、(3) の場面では、B1 の立場は、A の台詞の内容を知らなかったような外部からやってきた訪問者と思われ、他方、B2 の立場は、ブルックラインの住人で A の台詞内容であるブルックラインの条例は知っているものと推察されるのである。Kamio & Thomas (1999) では、Akatsuka (1999) の “newly-learned”

と“already-learned”という概念⁵を援用して、thatに“newly-learned”、そしてitに“already-learned”を適用させている。

教育の現場では、thatは指示代名詞なのだから、しっかりピンポイントで指し示すことの出来る場合に使用し、itは指そうと思ってもしっかりと指し示すことの出来ない対象物であり、「ことばそれ自体」を直接的に指しているのではないことは指導すべきであろう。伝統文法では、吉川（1966：99）で「心の中で『それ』とさすit」とこのようなitの用法を捉えている。

さて、(4)の文章は、航空保険を支払うシーンで持ち合わせのお金が足りないのではないかと思いつつ、あちこちのポケットの中からお金をかき集め、最後、所定の金額に達する場面である。Thatは明示的に相手にもわかる目の前に出した現金、そしてitは意識された現在の話題の中心となっている所定の保険料。最後に出した現金を加えることによって、所定金額と等価になる。そこでbe動詞で連結され、That's it!という慣用表現が成立しているのである。

(4) He added some dimes and pennies to the pile of change on the insurance counter. Then, miraculously, in an inside pocket, he found a five-dollar bill. Not concealing his excitement, Guerrero exclaimed, “That's it! I have enough!” There was even a dollar or so in small change left over. (Arthur Hailey, *Airport*)

(彼は保険カウンターの上に10セントを何枚かと1セント硬貨を何枚か、小銭の山に追加した。そのとき、奇跡的に、ポケットの中に、5ドル札を見つけたのだった。ゲレロは、自分の興奮した様子を隠しもせずに、叫んだ。「これこれ！十分だろ！」まだ、1ドルと小銭が少々残っていた)

さらに(5)は(4)に出てきた慣用表現の“That's it”の主語と補語の要素が入れ替わり、否定文となった形である。itがGinnieの心の中を漠然と指し、thatがAren'tcha hungry?で、「お腹が減っているだろう」という相手の質問を指している。つまり自分の心の中は、サンドイッチを食べてなんかいられないんだということで、最後にShe goes insane if I'm not hungry, I mean. と自分の心の中を明示して相手に理解してもらうことになる。このような変形ヴァージョンの存在は、慣用表現といえども、その構成素から、かなりの部分がその語の根源的な意味を継承していることの証左となろう。

(5) “I got a half a chicken sandwich in my room. Ya want it? I didn't touch it or anything.”
“No, thank you. Really.”

“You just played tennis, for Chrissake. Aren’tcha hungry?”

“It isn’t that,” said Ginnie, crossing her legs.

“It’s just that my mother always has lunch ready when I get home. She goes insane if I’m not hungry, I mean.”

(J. D. Salinger, “Just Before the War with the Eskimos”)

(「部屋にチキンサンドが半分残ってるんだけど。欲しいかい。手をつけちゃいないよ。」
「ほんと、結構」「テニスをやったばかりなんだから、腹減ってるだろ」「そんなんじゃないの」とギニーは足を組みながら言った。「家に帰ると母がいつも昼食をすでに用意しているからだけなの。わたしがお腹へっていないと、すごいことになっちゃうから。」)

1.4 外置と重名詞句転位

さて、ここでようやく、言語現象を考察するための下拵えが済んだので、事例分析に取り掛かることにする。

まずは、一般に形式主語と呼ばれている現象をみてみる。

(6) It is well that⁶ a writer should think not only that the book he himself is writing is important, but that the books other people are writing are important too.

(Somerset Maugham, *A Writer’s Notebook*)

(作家が自分自身で書いている本を重要だと考えるだけでなく、他の人が書いている本も重要だと考えることは、よいことである)

名詞節を導く that 節が主語の位置では長すぎるために、右に移動し、空白になった主語の部分に形式的に主語を据えるといったものである。このような説明が正しいとすると、it に後方照応的な機能を認めることになるし、さらに節そのものを指示することになる。しかし、it は人称代名詞なので、話者の念頭にある概念がまず主題として提示され、そしてその評価が題述として下される。聴者にとって、その評価が何に対する評価であるか、主題の内実を明示するために that 節以下を展開させるのである。(6) では、最初の発話者が指示詞 that を使用することによって、話者・聴者の両者に主題内容が情報的に充足しているため、話者と聴者の間で、何についてのことが言及不要となる。よって that 節として外置構造をわざわざ設定して無駄に既知情報を追加する必要はないのである。

(7) “Is that well?”

“I think it is well.”

(Charles Dickens, *A Tale of Two Cities*)

(「あれはいいかな。」「わたしは、いいと思うよ」)

(8) の事例は、いわゆる外置だけではなく、英語教育でも such…that といった相関語句としても紹介される言語現象を含むものである。これらも、「ほとんどの人はそんな程度の馬鹿者さ」という情報が提示され、聴者にとっては、どの程度のものなのかが、情報として欠落しているために、話者は聴者の意識を that 以下に「指示し」説明を継続するのである。このように接続詞の that ですら、元来は指示詞なのであるから、その指示性は弱化しても、その意味の色合いが残っているのである。

(8) Most people are such fools that it really is no great compliment to say that a man is above the average. (Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(大半の人は馬鹿なので、その中の平均より上と言われても、ほめ言葉にはならない)

次の (9) と (10) は不定詞の名詞的用法で that 節のときと同じように主語が長いので、主語の位置には形式主語を据え、文末にいわゆる真主語を置くとされているものである。すると (11) に挙げたような不定詞が主語のままに生起している現象を (9) や (10) の to 不定詞句の語句の長さを比較しても何の答えも出てこないはずである。ここでの情報の欠如とその補充のために、かような文構造として成立しているのである⁷。

(9) It was an effort for him to ask the next question.

(次の質問をするのが一苦勞だった。) (Sidney Sheldon, *The Naked Face*)

(10) You can see that it's chipped, so it isn't fair to punish him because –

(Sidney Sheldon, *Morning, noon & night*)

(見てごらんよ、欠けているでしょ。彼を罰するのは公平じゃないよ…)

(11) ...he asserted that his object was merely to state, leaving the reader to write his own novel, as it were, on the data presented to him, and that to attempt to do anything else was literary fudge. (Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(彼の主張はこうだった。自分の目的はいわば自分に提示されたデータを単に述べるだけで、読者はそれを元に自分自身の小説を書けばいいと主張した。そしてそれ以外のことを試みても、文学的なごまかしにすぎないのだと言った)

(12) の事例で興味深いのは、類似の構造でありながら動名詞の外置と不定詞の外置とが連続しているところである。意図的にその直前から引用したが、動名詞の外置が起こる直前には、ビールとタバコのシーンが出てきて、より習慣的な動作であることを窺い知ることが

でき、一方、後半の不定詞による外置では、今回の個別具体的な動作の描写であるように感じられる。どちらにせよ、It was (very) pleasant と個人の感覚をまず述べ、それが何に由来するものなのかをそれぞれの準動詞以下の語句で、情報を補充しているのである。

(12) ...and I poured my beer and settled back comfortably with a cigarette.

It was very pleasant sitting there in the sunshine with beer and a cigarette. It was pleasant to sit and watch the bathers splashing about in the green water.

(Roald Dahl, "Man From the South")

(ぼくはビールを注ぎ、タバコをくわえたまま、心地よく背もたれにもたれかかった。そんな日光の下でビールにタバコを飲みながら腰掛けているってとてもいいものだ。海水浴たちが青々した水の中で、あたりに水しぶき飛ばしているのを座って観察しているのもいいものである)

(13) の文頭の it は話者の念頭にある内容で、聴者には分からない内容であるために、if 以下で情報が補充されている。このような it が日本語にしにくいため、状況の it や環境の it などと特別扱いされているが、対応する日本語がないからといって、英語の it に特別な意味が発生するわけではないのである。

(13) It would not even surprise him if Cindy guessed about his own and Tanya's rendezvous for later tonight, though perhaps, he reflected, that was carrying imagination too far.

(Arthur Hailey, *Airport*)

(驚くにあたらないものだろう、もしシンディが今夜遅く彼とターニャが密会することを想像したとしても。ことによると、そのことは想像しすぎの感があるがと彼は思った)

(13) と同じような感覚のものを2つ提示することにする。(14) における下線の it は密輸をしている your man それだけを指すわけでもなく、また現在分詞の smuggling をいわば再解釈して動作名詞として扱い、指示しているわけではない。まさに your man was smuggling の内容を概念化したものを指しているわけで、従来の状況の it と言われているものである。(15) では、冒頭の It に関する情報の補充が if 節の中に前置詞句、そして関係詞節と何重にも畳み込まれて、本の内容がもっと面白くなる叙想内容を充当している。

(14) "Then even if your man was smuggling," Mel pointed out, "it would be into Italy...."

(それじゃ、君の言っている男が密輸をやっていたとしても、イタリア入りしているころだ)

(Arthur Hailey, *Airport*)

- (15) It would doubtless have made the following pages more amusing if I had recorded my conversations with the many and distinguished writers, painters, actors and politicians I have known more or less intimately.

(Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(疑いなく、この後のページはもっと面白くなったかもしれない。多くの有名な作家、画家、俳優、そして政治家たちと多少とも知り合いだったんで、彼らとの会話を記録しておけばね)

さいごは、重名詞句転位と呼ばれている現象を考察する。(16)において他動詞 keep の直後に生起する目的語が、本来その目的語に後続するはずの目的格補語である形容詞の secret が他動詞の直後に生起している。この重名詞句転位は、単に目的語の長さだけの問題であろうか。また、学校文法では、そのような場合、形式目的語を立ててから、本来の目的語を後続させるはずである。本稿の立場では、語が同じならば同じような意味がどこかにあるだろうし、語順が共通ならば、それによって何らかの機能も共通部分があって不思議ではない。(16)の目的格補語と目的語との関係をミクロレベルに考えると目的格補語が主題の機能を果たし、目的語が題述として機能しているのである。このことは、文レベルでは主語が主題になりやすく、さらに主語は旧情報を担いやすく、よって少な目の情報量となる。それに対して題述部分は主題の展開であるので、より長くなる現象は、偶然ではなく自然なことである。(17)の事例は語順転倒している文であるが、形容詞が主題となってそれに続く、be 動詞と主語たる関係代名詞の先行詞、そして関係代名詞節以下すべてが題述となって、主題たる rash と判断される状況を克明に明示しているのである。

- (16) ...they ask what need there was to keep secret the motive for suddenly summoning a council, especially as it must have been foreseen that a panic would be caused and a great deal of money lost on the Exchange. (Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(彼らは尋ねたのだ。何の必要があって秘密にしたのか。内閣の突然の召集、そして特に、パニックは起こるであろうし、為替取引所では、多大なる金額の損失が見込まれたはずなのにと)

- (17) In England writers sometimes send their unpublished works to fellow craftsmen for criticism, by which they mean praise, for rash is the author who makes any serious objections to another's manuscript. (Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(イギリスにおいて、作家たちはときどき自分の書いた未発表作品を仲間の作家に送り、批評を求めるが、その批評は賞賛を意味する。というのは無分別の作家と判断される

のは、他人の原稿に本気で反対意見を出す作家だからだ)

このように、従来有標構造として扱われてきた現象の背景には情報構造的に示唆的な仕組みが存在する。まず、(18)の事例を提示する。

(18) She gave him a long, long stare and into her eyes came a strange look. Was it contempt or despair? Mr Joyce could not tell.

(Somerset Maugham, “The letter”)

(彼女は彼を長々見つめると、彼女の目にはなにやら不思議な表情が表れたのだ。軽蔑なのか絶望なのか。ジョイス氏には分からなかった)

第一文の and の右側に LVS 構文 (場所格倒置) が生起している。名詞の stare から連想しやすい eyes という語を “into her eyes” という副詞句を主題にし⁸、下記のような情報の展開が途切れなく流れているのがわかる。

旧情報 (she) → 新情報 (a long, long stare)

旧情報 (her eyes) → 新情報 (a strange look)

旧情報 (it) → 新情報 (contempt or despair)

このように旧情報を機軸に主題として論じ始め、徐々に新情報を組み込み、情報を組み込んだ瞬間から、話者は聴者に対してその情報を旧情報と扱い、その旧情報を機軸にあらたな情報を追加していく。このような言語の線条性が英語の特徴なのである。

さきの「1.3」で “That’s it” という慣用表現的な問題について言及したが、ここでは、it とそれに後続する情報について考察を進めたい。従来、make it の it と同様、とくに意味のない it とされているが、本稿では異なる立場をとる。つまり話者の意識の中では、しっかり存在し、ただ言語化されていないだけで、聴者にとって欠落した情報を直後に straight down the line と補充している。これも従来は単に文末焦点なり文末重点と呼ばれているが、それは言語を発話の時間軸上から捉えた場合、あまりに表層的な観察に過ぎない。頭部過大 (top-heavy) を英語は嫌う、という説明も後付け的な観察結果である。

(19) “You’ve always played it straight down the line, haven’t you?” Demerest said.

(Arthur Hailey, *Airport*)

(「きみはいつも人生を (悪いことをせず、ちゃんと) ずっと歩いているよな」とデマレストは言った)

つまり頭部過大で非文とならない場合、説明に窮することになる。(20) の文章の下線部の文は、主語が11語であり、補語は形容詞の *savage* 1語である。なぜ、このようないわゆる頭部過大が自然と存在するかは、その文だけを考えても答えは出てこない。大切なのは、談話の流れ、つまり情報構造を組み込んで理解しなければならない。「彼の描いた当時の文壇生活の絵図」という主語に相当する部分に生起する内容は、この下線部を含むパラグラフで既に語られている旧情報であり、話者の新たな主張は、題述部分になる補語の1語だけなのである。単に統語的分析のみで、言語のシステムを語ることが如何に無謀であるかを物語るものである。

(20) Here his keen powers of observation were of service to him. But though his portraits have verisimilitude... (中略) The picture he paints of the literary life of his day is savage. (Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(ここでは、彼の鋭い観察力が役立っていた。しかし、彼の人物描写は真相に迫っていたが… (中略) 彼の描いた当時の文壇生活の絵図は残酷なものである)

2. 関係詞節構造

2.1 関係詞節構造の構成要素

まず、関係詞節構造に関する議論に入る前に、その関係詞自体の構成素である指示代名詞の *that* や疑問詞 *who*、*which*、*when*、*where*、*how* における意味的機能を考察する。

周知の事実から確認していくことにしよう。(1) では、真夜中に、突然声をかけられ、声の主が分からなかったので、*who* で尋ね、それが誰であるかが話題の中心となっているため、主題兼主語として *it* で受け、題述にてその情報内容の開示を行っている。(2) の文章では数分前に読んだメール内容に対しての反応で、自問自答の内容となっている。途中でメールが終わっている理由が不明のため、*why* で表現し、メールを途中で終わらせているには、何か起きていたのだと推論を行い、そしてその事態が不明であるために *what* で表現し、さらに見知らぬ人名が出てきたために、*who* を使用している。疑問詞の基本は、話者にとってある情報が欠落しているために、聴者に対して、その情報の欠落を補充してもらうためのマーカーである。言うまでもなく、自問自答は、思考を深化させるための、一見、答えが出ないものに対して、自分の持ちえる旧情報を総動員して、問いと答えをワンセットにして覆い隠された情報を見出す行為である。(3) の文章では、囚人は複数存在し、その囚人という集合からどの選択肢が該当するかという情報の絞込みの行為であり、間接疑問文の形式をとっている。

(1) 'Hello, Phil?'

'Hey ... ' he said sleepily. 'Who's this?'

'It's me - Oliver. '

(Erich Segal, *Love Story*)

(「やあ、フィル」「おい、誰なんだ」と彼は眠そうにいった。「ぼくだよ、オリバー」)

(2) The message had ended suddenly. Why had Franz not finished it? What could be happening? The night before, she had heard her husband saying to someone on the telephone that Prima must be stopped at all costs. Who was Prima?

(Sidney Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

(そのメッセージは突然終わっていた。なぜフランツは最後までしなかったの？何が一体、起きているの？前の晩、旦那が誰かと電話をしていて、どんな犠牲を払っても、プリマを止めなくちゃいけないということを耳にした。プリマって誰？)

(3) On visiting days it was easy to know which inmates had friends or relatives coming to see them.

(Sidney Sheldon, *If Tomorrow Comes*)

(面会日には、どの囚人に友達やら親類やらがやって来るのかは、簡単にわかった)

そもそも wh- 関係詞は歴史的にも、間接疑問文に起こる疑問詞の機能が拡張したものである。いわば、疑問文が「間接」であるために疑問の意味合いが弱くなった疑問詞が、同時に音調も弱化し、関係詞として機能するようになったという事実がある。また、関係詞の that が指示詞の that から発展してきたということも事実である。すると表面的な文法機能が異なっても、同じ形態を現代でも使用しているわけであるから、意味・機能のレベルで共通項が存在するはずである。

2.2 関係詞

指示詞 that の意味特徴は、「指示集中的」であった。つまり、指示対象を迷うことなく指し示すことが出来ること状況である。学校文法において、関係代名詞 that が好まれる状況に、先行詞に最上級や the very, the first, all, no などが挙げられている。これらすべてに共通する特性は、《2つとないこと》である。つまり指示する対象を《どれか》と which のような指示対象に複数の可能性がない状況である。まさに、これは that の「指示集中的」の機能を発揮できる環境になっている。(4) では、「これが最高のものだ」断定しているが、それがいったい何なのか、話者はまだ明言していない。そこで自らその情報の欠落を補充する形で、関係詞節を後続させている。(5) では、「彼が唯一の人だった」と述べても、やはり情報量が足りない。そのために発話者自身が聴者のために、先行詞を主題に見立てて、再度、

題述として情報を補充している。

- (4) I know that this is the best thing that life can offer, and it is a thing that almost all men, though perhaps only for a short time, have enjoyed.

(Somerset Maugham, *The Summing Up*)

(これこそが、人生が与える最高のものであり、ほとんどすべての人たちが、ひょっとすると僅かなときであっても、楽しく経験することであろうことを私は知っている)

- (5) I mean he was the only person that was there that I know really detests me.

(J. D. Salinger, *Zooey*)

(あそこにいた人で私のことを本当に嫌っているのは私の知っている人では彼だけだったということ)

(6) では、先行詞が someone という不定代名詞が存在し、「人間」であり「非特定の」であるために that よりも who が使用されている。さらに情報量の観点から、「誰かがいると思った」といっても、誰でもいいわけではなく、その最低条件として、「自分の手助けをしてくれる人」であることが、情報として補充されている。同様に、(7) でも先行詞の the security signal には、諸々の属性特徴があり、ここではその一つが選択され、「毎週変更されている」という情報が補充されているのである。言うまでもなく、the security signal というものを類別化する機能ではないので、関係詞の継続によって先行詞の対象物が論理的に「唯一」のものになるわけではなく、that が関係詞として使用された場合と先行詞との関係の「密接性」が大きく異なるわけである。このことが、that がいわゆる「限定用法・制限用法」のみに使用されるといった語彙特性の必然的な帰結ともなっている。

- (6) I thought there might be someone there who could help me.

(Sidney Sheldon, *Are You Afraid of the Dark?*)

(そこには誰かがいると思ったの、私に手を貸してくれる)

- (7) Banks the world over have arcane safety procedures, and the Philadelphia Trust and Fidelity Bank was no exception. The routine never varied, except for the security signal, which was changed every week.

(Sidney Sheldon, *If Tomorrow Comes*)

(世界中の銀行は秘密の保安体制を有しており、フィラデルフィア信託銀行も例外ではないのだ。日常業務は決して変化することはないのだが、警備上の合図に関しては例

外で、毎週変えられていた)

さらに情報構造的に示唆的な関係詞と擬似関係詞の事例を考察していく。(8)において最初の関係詞は *that* であり、先行詞は *all* である。《すべて》とは《それ以外は存在しない》と論理的に同値であるため、指示集中的な *that* が選択される。そして *larger* は比較級の形をとっているが、その比較対象がそれまでは非明示的なので、*than* という擬似関係詞を導入し、その比較対象と節構造を導入するための接続詞としての機能を果たしている。さらに話題の中心が30万ドルの大金にスライドしたので、その大金が主題 (*theme*) となって等位接続詞の右辺ではその大金についての情報を題述 (*rheme*) 内容として後続している。また *dream* の直後のダッシュ (*dash*) により時間的な間が生じ、その未決定状態 (*suspension*) が後続部分に焦点を当てる効果が生じている。*dream* 以下の内容は、単なる補足内容ではなく、談話の展開上必須要素である。かりに追加情報がなければ、グライスの量の公理に抵触し、不自然な内容となる。

(8) All that he wanted was to sit and dream — of three hundred thousand dollars, a larger sum than he had ever possessed at one time before, and which would be coming to Inez and the two children, he presumed, in a matter of days.

(Arthur Hailey, *Airport*)

(彼はただ座って空想していただけなのだ—30万ドル、一時に持ったこともない大金、そして大金がイネズと二人の子供に数日中に入ってくると彼は思っているのだった)

さいごに、不定詞の外置に関係代名詞も続き、さらに先行詞が次の文の主語となり叙述的に情報が付加されてきている事例を提示しておく。

(9) It is not my business to attack or to defend the system which the French have thought fit to adopt in regard to their criminals. Besides, the system is now condemned ;

(Somerset Maugham, "A Man with a Conscience")

(フランス人が犯罪者たちに対して採用するのが適当だと思っている制度に関して、非難したり弁護したりすることは、私には関係ないことです)

以上の疑問詞と関係詞の考察から明らかになったのは次のような機能である。そもそも疑問詞の機能とは「情報の欠落を聴者に問い、それを補充する機能」である。一方、関係詞の機能は「話者の有する情報で、聴者にとって、不確かなもの(または、欠落しているもの)を、話者自身が補充する機能」である。よって、「疑問詞と関係詞の共通点は、情報の補充

にあり、その差異は補充するのが話者か聴者かだけである」との知見を本稿では導き出すことが出来た。

2.3 同格と関係詞の外置

同格節の外置について検討していくが、最初の(10)は、幾重にも有標的な表現となっている。まず、他動詞 *splashes* の目的語である *everything* が、前置詞句を飛び越え、目的語の *everything* には接触節として *he doesn't understand* と否定内容の情報が後続している。そして等位接続詞 *and* の直前にカンマが存在し、情報の流れがいったん整えられ、*the possibility* が主題兼主語として立ち上がる。しかしながら「例の可能性」という表現内容の指示が漠然としていて、その漠然さを解消するのが同格節の内容の *the fault may lie in himself* である。*and* の左辺では、情報の焦点であった目的節の *everything he doesn't understand* が、*and* の右辺では、*if he doesn't* と条件節内で前提内容と扱われ、さらには、主語の *the possibility* の同格節内で挿入される形で生起している。目的語の右方への移動は重名詞句転位として文法的には処理されるものであるが、焦点から前提へという情報構造のシフトは、前節の新情報から次節の旧情報へ変化していくダイナミックな認知過程である。

- (10) He splashes with his angry contempt everything he doesn't understand, and the possibility never occurs to him that if he doesn't the fault may lie in himself.

(Somerset Maugham, *A Writer's Notebook*)

(彼は自分の理解できないものに対して怒りにみちた侮蔑^はを撥ねかけ、その問題が理解できないときに、その可能性が自分の中にあることをまったく思いもしないのである)

一般に関係詞の外置と呼ばれる現象である。話者のモノログならば、*the time is coming* で、英語の構造は問題ない。ところが、主題として機能している *the time* がどんな *time* なのかが情報的に欠落しているため、「それがどんな時か」と *when* 以下で欠落情報を補充しているのである。よって *the time* の直後にあったものが文末に移動したと言う説明は方便であって、言語学的にも不適切であると言うしかないのである。

- (11) Believe me, the time is coming when we'll wish we had the simplicity of the kind of noise we're talking about tonight.

(Arthur Hailey, *Airport*)

(信じてください。今夜我々が話し合っている騒音なんかの問題が単純なものであると願える日が来るんですよ)

3. おわりに

本稿では、指示詞である that と人称代名詞である it をそれぞれ、「指示集中的」と「指示拡散的」と特徴付けた神尾（1990）や Kamio& Thomas（1999）の知見を援用して、形式主語と称されている it と外置構文との関係に関して、その本質的な意味を明示した。加えて、it を含む慣用表現も it という語の本質的な意味から導き出すことが出来ると主張した。また重名詞句転位と呼ばれている現象なども情報構造の観点から特徴付けた。さらに関係詞と疑問詞の意味的・機能的特徴に関して「情報の欠落とその補充」という捉え方を提示し新たな情報構造研究に寄与した。

¹ ミニマリスト・プログラムでは、結合（Merge）の操作のほうが移動よりもコストが低いと主張しているものの、「移動」がいまだ存在していることには変わりない。

² 言語表現に無標構造と有標構造が実際は、ないとは主張していない。

³ 21世紀に入って出版された先行研究を踏まえつつ実証主義の立場を意識した安藤（2005）では「it の特別用法」という表現は存在せず、非人称の it といわゆる形式主語の it と同列に論じることがはしていないのは、注目に値する。また、安藤（2007：77）では非人称動詞の主語となる it とそれ以外の it を外界に指示物（referent）をもっているか、いないという観点は本稿の立場と共通する部分がある。Huddleston& Pullum（2002：1481）では「it の特別用法（special uses of it）」という区分けの中で非人称の it が分裂文の it や外置の it などが混在して列挙されて、“dummy, semantically empty pronoun” と表現されているのは、考察の浅さを感じざるを得ない。

⁴ 高校生を指導対象としたものに、萩野（1996）はコンパクトながら、生徒のつまずきに気づき、指導ポイントとして this/that と it の使い分けについて事例を挙げているのも、英語教授者に対して、問題点の明示といった観点から良書といえよう。

⁵ この概念の初出は Akatsuka（1985）である。

⁶ 引用例文中の下線は、すべて筆者による強調である。

⁷ 吉川（1955：387）において主語の位置に不定詞が生起する場合についての説明が次のようになされている。

「主語として不定詞が文頭に位置するのはむしろ特別な場合であって、特にそれを取り上げて主題とする必要のある時であり、随って平叙文の場合に主として用いられる。普通の場合、殊に平叙文以外の構文では、形式主語の位置をとり、不定詞が文の後尾にまわる。」

ここで、記述文法における吉川（1955）の背景にある英語における原理・原則を簡単に言及しておく。「主題の場合」とは、文頭に副詞句が生起すればそれが主題となる場合もあるが、英語ではそもそも主語そのものが主題になりやすいので吉川の説明では不十分である。主語での不定詞の使用が「特別な場合」であるのは、「to 不定詞」自体が to の本来の意味から「未だ実現していない」内容を表現するものである。このため、情報構造的に主語には旧情報的な要素が生起しやすいために、不定詞との折り合いが悪いのである。

しかし、つぎで示すように対立や条件などの内容の場合、旧情報でなく主題として取り上げられた場合、主語として充分機能を果たすことになる。さらに、わざわざ言語学の文献から引用しなくとも、to 不定詞の「未実現」の意味が「条件」という「帰結」の実現前の事態を表し、ま

た時系列的に「仮定→帰結」や「原因→結果」といった論理的展開と、英語の語順が対応するので、表現として定着したと考えられる。

To fall was to die.

= If someone were to fall, he would unquestionably die. (Duffley (1992 : 126))

⁸ 久野 (1978 : 25) では、このように副詞が主題として機能するものを、「主題的副詞」と呼んでいる。

参考文献：

Akatsuka, Noriko (1985) "Conditionals and Epistemic Scale," *Language* 61 : 625-639.

Akatsuka, Noriko (1999) "Towards a Theory of Desirability in Conditional Reasoning,"

Function and Structure, eds by Kamio, A. and K. Takami, 195-213

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社

安藤貞雄 (2007) 「It のステータスについて」『英文法を探る』 76-86 安藤貞雄 開拓社

[[『英語青年』 1998年1月号初出]

Bolinger, D. L. (1977) *Meaning and Form*, London : Longman.

Curme, G. O. (1931) *Syntax*, Boston : D. C. Heath and Compny.

Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*, London : Longman.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 改定三版』 金子書房

Grice, H. (1975) "Logic and Conversation", in Cole & Morgan (eds.), *Syntax and Semantics* 3, 41-58. New York : Academic Press.

萩野俊哉 (1998) 『ライティングのための英文法』 大修館書店

Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge : Cambridge University Press.

神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』 大修館書店

Kamio, Akio and Margaret Thomas. (1999) "Some Referential Properties of English *It* and *That*' *Function and Structure*, eds by Kamio, A. and K. Takami, 289-315.

Amsterdam : John Benjamins.

久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店

小寺茂明 (1989) 『日英語の対比で教える英作文』 大修館書店

小寺茂明 (1996) 『英語教科書と文法教材研究』 大修館書店

Lakoff, Robin (1974) "Remarks on *This* and *That*" *CLS* 10. 345-56 [再録『海外英語学論叢 1976年版』 安井稔 (編集・解説) (1976) 83-99 英潮社]

村田勇三郎 (2005) 『現代英語の語彙的・構文的事象』 開拓社

中島平三・池内正幸 (2005) 『明日に架ける生成文法』 開拓社

中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 英語学体系 9 大修館書店

佐久間鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法』 くろしお出版

埋橋勇三 (1995) 『英文法講話』 ライオン社

渡辺明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』 大修館書店

吉川美夫 (1955) 『英文法詳説』 文建書房

吉川美夫 (1966) 『考える英文法』 文建書房

吉波和彦・北村博一・上野隆男・本郷泰弘 (2007) 『ブレイクスルー総合英語』 美誠社

Information Gap and its Supplement

KIUCHI, Osamu

This present study has been undertaken in order to demonstrate the phenomenon of the so-called “Extraposition from NP” and Relative Clauses from the standpoint of Information Structure. Some studies have claimed that a formal subject *IT* is a dummy, semantically empty pronoun, but this description is inadequate for the properties of a personal pronoun and a demonstrative pronoun. Contrary to their opinions, we maintain that the so-called formal subject *IT* refers broadly to “already-learned” information, while the demonstrative pronoun *THAT* narrowly specifies its referents, which is “newly-learned” information. Therefore, vague information in *IT* requires that the speaker must supply gap in person to make it clear and explicit in his/her statement. Furthermore we clarify the common meaning between an interrogative pronoun and a relative, and the Information Gap and its Supplement can be used in explaining the relationship between antecedents and Relative Clauses.